

★えほん★

「あかいろうそく」

新美南吉／作 いもとようこ／絵 金の星社 Eアカ

さるがあかいろうそくをひろった。さるはそれを「はなび」だと思ひこみ、やまのみんなに見せたが、だれも「はなび」を見たことがない。そこで「はなび」に火をつけにいくものをくじ引きできめることになったが…。



★よみもの★

「大どろぼうジャム・パン」

内田麟太郎／作 藤本ともひこ／絵 文研出版

931ウチ

こわれたへいたいロボットがあばれだして、日本の村をふみつぶしている。れんらくをうけたジャム・パンは村人たちを救いにむかう。ジャム・パンは弱いものを助け、平和をのぞむ正義の大どろぼうなのだ。



★しらべもののほん★

「クニマスは生きていた!」

池田まき子／著 汐文社 66

秋田県の田沢湖にしかいないと思われていたクニマスは、約70年前、ダムの影響で絶滅したとされていた。ところが、2010年に山梨県の西湖で発見された。なぜ遠く離れた湖で発見されたのか？また田沢湖にクニマスを帰すことはできるのか？



あたらしい本のコーナー

「きかんしゃリトル はじめてのぼうけん」

ティモシー・ナップマン／作 ベン・マントル／絵
まえざわあきえ／訳 ひさかたチャイルド E4マン

「だいじょうぶよ」とママ、「きみならできるよ」とパパ。はじめてひとりでせんろをはしるリトル。やまをこえどどんゆくと、うみのまえでせんろはおわり。くらくらこわくなってきたリトルは、パパのことばをおもいだした。



「大根はエライ」

久住昌之／文・絵 福音館書店 E2タイ

「大きな根っこ」で大根。あまりにもそのまんま。ちっともエラそうには見えない。人間にたとえると、まじめでおとなしい感じ。でもこの大根くん、そのまますれば大根おろし、干切りにすればお刺身のツマ、煮てもおいしい。日本の食卓で大活躍なんだ。



「北極サーカス」

庄野ナホコ／作 講談社 E3シヨ

こんどのにちようびにサーカスがやってくる。ドゥラララララ…。ドラムのおとがよびかける。「さあ、はじまるよ!」氷ののってやってくるまっしろい動物たち。サーカスは、不思議でゆかいで、なぜだかすこしかなしくて。らいねんもまたあえますように。



「お母さんの生まれた国」

茂木ちあき／作 君野可代子／絵 新日本出版社

931モチ

未来のお母さんはカンボジア人だ。子どもころ、カンボジアで戦争があったとき、難民として日本にやってきたのだ。未来が5年生の夏休み、お母さんのふるさと、カンボジアに行くことになった。



「熊とにんげん」

ライナー・チムニク／作・絵 上田真而子／訳 徳間書店 932チム

熊を一頭つれた男がいた。いなか道を村から村へ、芸をみせながら旅している。この男にはとくべつなことが三つあった。熊のことばがわかること、心根がいいこと、七つのまりでお手玉ができることだ。男と熊の長い旅でおこるできごととは。



「さよなら、おばけ団地」

藤重ヒカル／作 浜野史子／画 福音館書店 931フシ

とりこわしが決まっている桜が谷団地は、別名「おばけ団地」とよばれていて、「旧番地」にはもう人は住んでいない。にぎわっていたころから、おばけやゆうれいのうわさや怪談はたくさんあったが、団地が消えようとしている今も実はふしぎなことがおきていた。



「世界を救うパンの缶詰」

菅聖子／文 やましたこうへい／絵 ほるぷ出版

58

阪神・淡路大震災で被災した人のために、焼きたてパンを届けたパン職人の秋元さん。しかしパンはあっという間にいたんでしまった。そこで秋元さんは、おいしくてやわらかくて保存のできるパンの缶詰を作ろうと決意する。



「日本全国祭り図鑑 西日本編」

芳賀日向／監修 フレーベル館 38

西宮神社の十日えびすの起源は鎌倉時代。「開門神事福男選び」は有名だけれど、大きなマグロが奉納されていることは知ってるかな？祭りには、その地域の人たちの歴史や文化がこめられている。迫力ある写真と説明で、君も祭りの達人だ!



「フランクtonのえほん ミジンコ」

吉田丈人／監修 ほるぷ出版 46

ミジンコって見たことある？たんぼやいけ、みずうみにいる、プランクトンのなかまだよ。じつぶつは1~3ミリメートルくらいのおおきさで、からだはとうめい。おおきなしゃしんでしっかりかんさつしてみよう。

